

平成24年度 第1回道徳教育について考える会 協議概要

日時：平成24年6月5日

9:00~12:00

場所：ピュアリティまきび

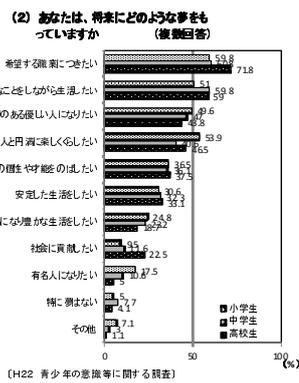
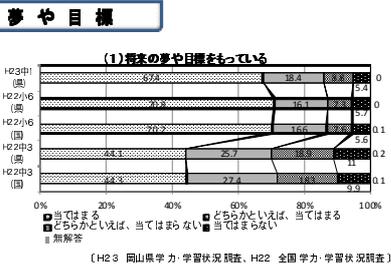
協議題

- (1) 本県の子どもたちの現状
- (2) これからの道徳教育の方向性

(1) 本県の子どもたちの現状

①夢や目標

本県の子どもたちの現状①



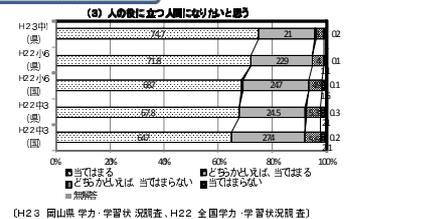
- ・「将来の夢や目標をもっている」と回答した子どもの割合は高い。
- ・年齢が上がるにつれて、「夢や目標をもっている」と回答した子どもの割合が低くなる傾向にある。
- ・(2)のグラフから、「特に夢がない」と回答した中学生の割合が、小学生や高校生にくらべて高い。

○ 夢や目標をもつとともに、人間の生き方にはいろいろな生き方があって、どのような生き方をしても、自分らしく生きることがすばらしいという思いをもってもらえれば、このデータも少しは変わってくるのではないかと思う。

②ボランティア意識

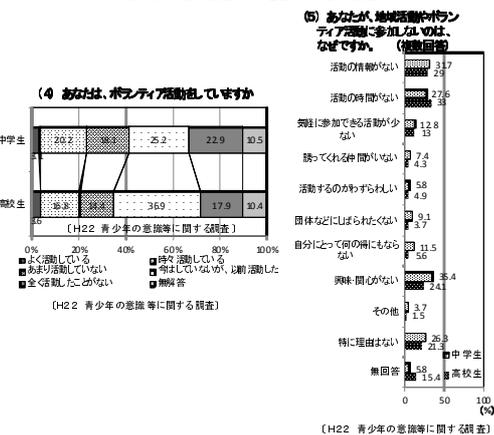
本県の子どもたちの現状②

ボランティア意識



- ・「人の役に立つ人になりたいと思う」子どもの割合は、高い傾向が見られる。全国とくらべても、岡山県の肯定の割合は高い。
- ・一方、ボランティア活動をしている割合は高くなく、参加しない理由としては、「活動の情報がない」「活動の時間がない」「興味・関心がない」「特に理由はない」が上位を占めている。
- ・特に、中学生の「興味・関心がない」の割合が高い。

○ PTAでアンケートをとると、高校生はボランティアだと意識せずに活動していることが多い。普通のことを普通にしていることが社会に貢献していることになるという意識をもたせたい。また、中学生は、得になるからボランティアをしていると、素直に答える。経験を通して、損得に関係ないボランティア意識をもたせたい。

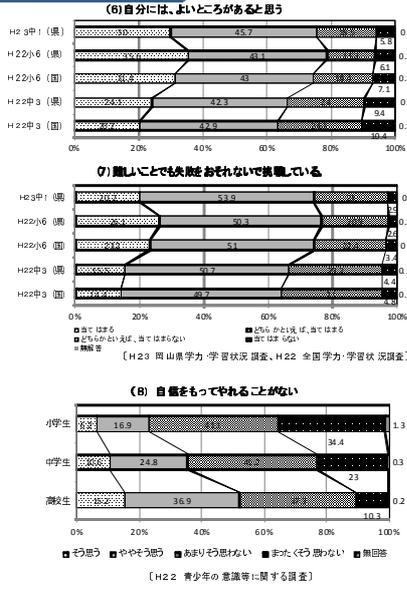


○ 人の役に立ちたいとほとんどの子どもたちが思っていることは、大変うれしい。子どもはボランティア活動をしたと思っていても、ある時期になると親がやめさせてしまうことがある。大人に、ボランティア活動の意義を知ってもらうことが必要で、そのために情報を発信していく必要がある。

○ ボランティア活動をしたいが、どうしていいかわからないという傾向が見える。小さい頃から福祉やボランティア活動に興味を持ってもらいたい。「夏ボラ」に参加する人数は確実に増えていて、岡山県で浸透していると思う。

本県の子どもの現状③

自尊感情



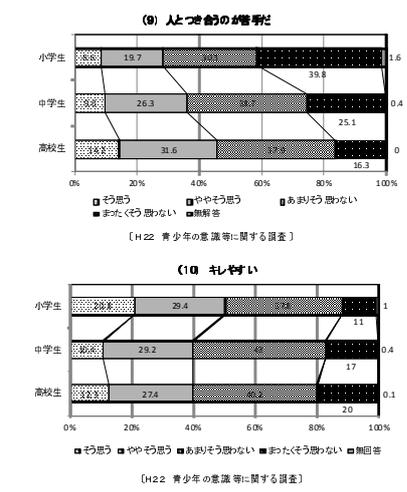
③自尊感情

・「自分にはよいところがあると思う」「難しいことでも失敗をおそれないで挑戦している」と回答した子どもの割合は、岡山県は全国よりも高い。
 ・一方、「自信をもってやれることがない」という子どもは、高校生になると5割を超える。

- 子どもたちは、心の中では行動したいという気持ちはあるのだが、一步を踏み出すことができていないと思う。子どもたちは、表面上は飄々としているように見えて、心の中では葛藤していると思う。
- 子どもたちは、行動しようとする勇気が出ない。それは、一步踏み出すときの不安や心配などの負荷が大きいから。行動できるためには、仲間や周りの人との触れ合いのある土壌が必要だ。
- 県で特別支援教育に力を入れていて、教師を対象にした研修が進み、一人ひとりを大切にする教育がなされているから、「よいところがある」と感じる子どもが多くなっていると思う。

本県の子どもの現状④

人間関係



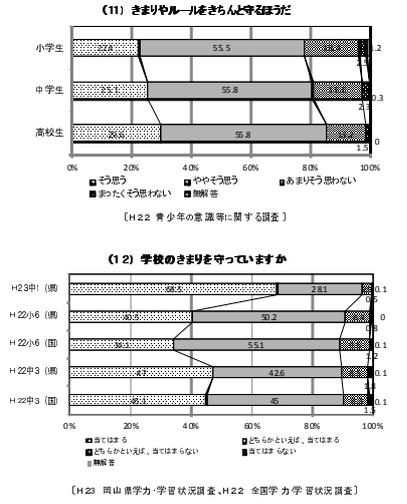
④人間関係

・「人とつき合うのが苦手だ」という子どもの割合は、学年が上がるにつれて高くなる傾向にある。
 ・「キレやすい」の問いに「そう思う」と回答した子どもの割合は、小学生は中・高校生のほぼ2倍になっている。

- 「キレやすい」子が小学校に多いということは、自分の感情を素直に出せる場が小学校では保障されているとも考えられる。中学、高校になるにつれ、自分の感情を素直に出せる場が少なくなっていることのあらわれかもしれない。
- 障害のある子が教室にいるが、一緒に育てることにより、気持ちをつなぐことができ、その子への関わりも積極的になると感じた。
- 中学校段階になると、保護者と学校の間には距離感が生まれてくる。これを解消するために、小学校段階から、同じ中学校区の小学校同士での保護者の交流をもつべきだ。

本県の子どもの現状⑤

規範意識

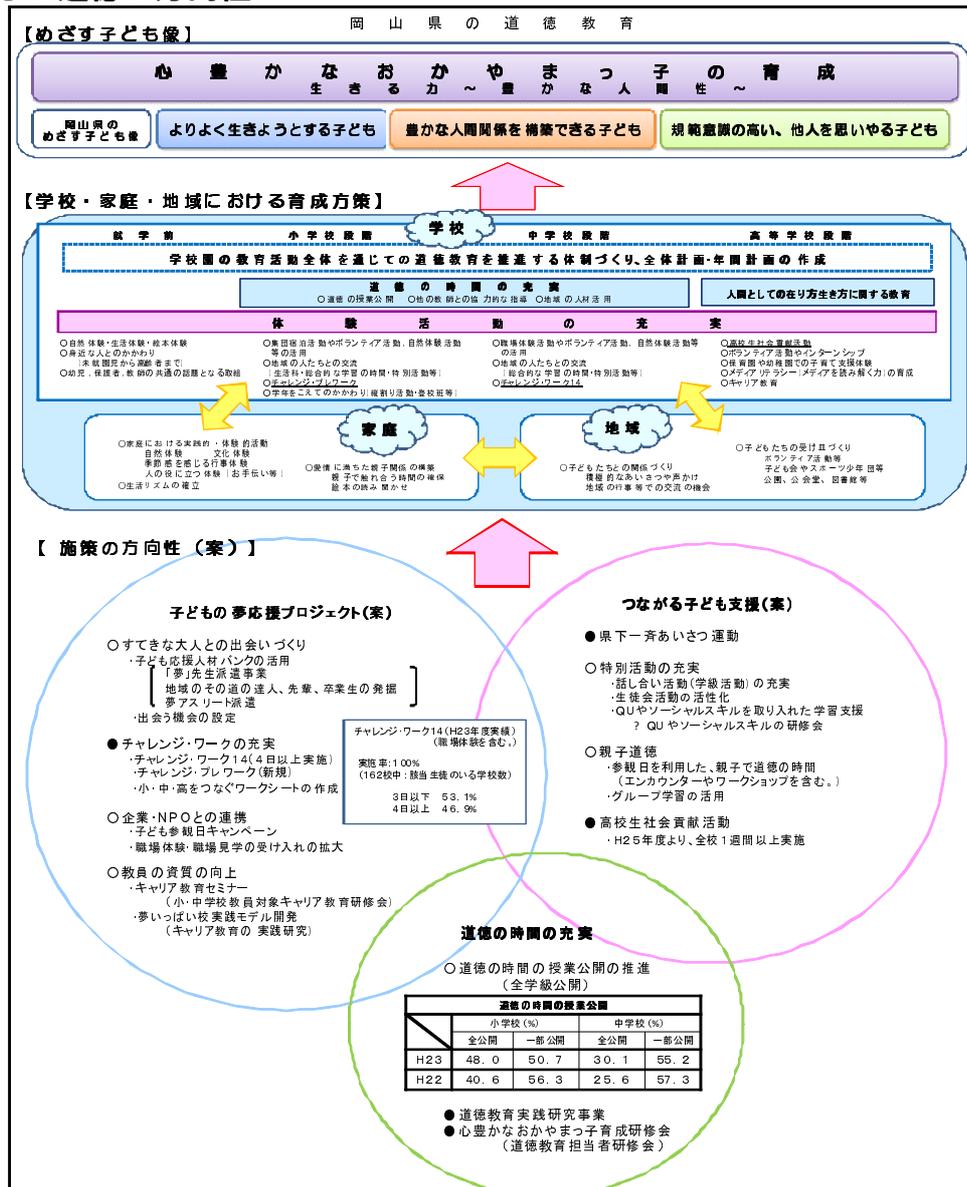


⑤規範意識

・「ルールやきまりを守るほうだ」と思っている子どもの割合は、学年が上がるにつれて高くなる傾向が見られる。
 ・一方、「学校のきまりを守っている」と回答した中学3年生の割合は、全国より低い。

- 小学生より中・高校生の方がきまりを守っているという割合が高くなっているのは本当だろうか。小学校はきまりが多いが、中・高校では自己判断の部分が増え、きまりとしては減っていることに関係しているのではないか。

(2) これからの道徳の方向性



《 学校での取組 》

- 教師の仕事は、生徒が自主的にやる気をもって、勉強や活動をするようにもっていくことである。そこで、高校では、社会貢献活動を中心に、総合的な学習の時間やLHRなどを使って、生徒にやる気の出るような活動を組んでいるところである。
- ボランティア活動も児童生徒の自主的な活動という意味で、学校現場に取り入れてもらいたい。
- 学校現場で、従来やっていることを道徳教育の観点から見直すというのが、最小の労力で最大の効果をあげることだ。新しいことを始めようとするは大変だが、今までしていることを道徳教育の観点から見直すことによって、立派な道徳教育になる。
- 「QU」は、楽しい学校生活を送るためのアンケート調査で、学級の実態把握にはとても有効だ。県下全ての学校で実施できるようにならないか。
- 就学前の部分は、「根っこの教育」といわれる。就学前は、保育所と幼稚園の連携が大切。連携の働きかけをより具体的に、より厚く進めるべきだ。
- 宿泊体験活動も道徳教育の中に取り入れられるのではないかと思う。生活をみんなで一緒にすることの意義は大きい。
- 親子道徳は、やり方次第でおもしろい取組になると思う。エンカウンターやワークショップ、それに、ピア・サポート等も取り入れることができると思う。
- 道徳の時間に親子道徳として、参加型のものを企画するとよいと思う。高校においても考えられる。これなら、保護者も参加しやすいと思う。ほかの人のいろいろな意見を聞いて、自分の意見が言えるような活動を取り入れた道徳の時間を親子で共有することで、話題も広

がるだろう。

- 道徳の時間などを学年を取り払って、縦割りで行ってはどうか。グループごとにテーマを決めて、3回完結ぐらいで学習を進める。そうすると、異年齢の交流が生まれ、そこに保護者も加わることで、さらに関わりが広がると思う。

《 学校・家庭・地域との交流、連携 》

- 道徳教育で学校と地域とをつなぐ役目を作るべきだ。学校に設置してある学校評議員会の中から1名を充て、学校の外から、客観的な立場で、地域・家庭・学校をつなぐ舵取り役が生まれるとよいと思う。
- 小・中学校にくらべて、高校になると学校と保護者との関わり方が難しくなる。各校の学校評議員とPTAと学校で、生徒を真ん中において様々な活動に取り組むのがよいと思うが、その意識付けの声かけを県がすれば一歩踏み出しやすいと思う。
- PTA活動に積極的に道徳教育を取り込む。楽しく分かりやすい方法で、しかも視覚的に保護者に見せる道徳教育を取り入れることが必要かと思う。無料で活動している県内の団体や劇団、又はボランティア団体等がたくさんあり、今は口コミで広まっているが、データベースを作れば、呼びたいときすぐ探せて、それを道徳教育に活用することによって抵抗なく保護者の道徳的視点が作られると思う。
- 県下一斉あいさつ運動は、今は学校の校門等に並んであいさつを盛んに行っているが、企業や事業所などにPRをして、地域のいろいろな人を巻き込むとさらに広がると思う。連携をすることにより、いろいろなどころであいさつをせざるを得ない状況を作ることができる。
- 平成25年度から、高校生社会貢献活動が全校で1週間以上ということで始まるが、この活動のどこかで保護者に向けての報告会を加えてもらえると、保護者にも活動の様子が分かってもらえる。
- 高校生社会貢献活動と総合的な学習の時間とLHRを関連付けた年間計画をきちんと立てて実施したいと考えている。その中に、道徳教育を位置付けていきたい。社会貢献活動の地域や家庭に向けた可視化、見える化を進めなければならない。
- 園に職場体験に来た中学生の体験カードには、保護者の感想欄が設けてあった。これは家庭との連携になる。

《 すてきな大人との出会い 》

- 道徳を「心の豊かさ」としてとらえるならば、もっと感性に訴える場を作っていくことも大事である。芸術・文化に触れる場を設定し、親子で感動を共有する機会を増やすとよい。
- 子どもだけでなく親も一緒に鑑賞するところに意味がある。こんな人を呼びたいと思っても予算的に無理な場合もあるので、このような会にすてきな大人の派遣を県にお願いしたい。
- すてきな大人との出会いとあるが、著名な大人や地域の名人さんたちだけではなく、一番身近な大人である父母との出会いもある。
- 保護者が堂々と学校に足を運べる機会をたくさんつくるべきだ。親子の出会いを設定し、保護者が堂々と学校に行くようになると、子どもや先生がいろいろな親と交流ができる。

《 教師の資質の向上 》

- 大人が心豊かな展望をもつことが、心豊かな子どもを育てることになる。子どもにとって身近な大人のモデルが大切だが、それは保護者と教員だと思う。特に教員は、自分が生きてきた中での苦労や挫折、小・中学生の頃の話をしつづつ子どもたちに話してやるとよい。「言葉の魔力」で少しの話が子どもの心に残り、地道な積み重ねで子どもの心を育てる。これには、教員の努力も必要だ。
- 今、教員に求められるのは、今の子どもたちの実態をきちんと把握する力だ。今の子どもたちは、本音を言わないので観察だけでは十分な把握はできない。実態把握の手段として「QU」等があるが、趣旨や有効性についてまだ理解されていないところもあり、正しい情報伝達の必要がある。
- 小中のボランティア活動や中学生の職場体験を受け入れてきており、その時に感じるのだが、教員は活動内容や目的を知らないことが多いということだ。できれば、教員にも生徒と同じものを体験してみて、同じことを感じたり知識を増やしたりして欲しい。